

小学校 学力調査の結果より

【国語】

「話すこと・聞くこと」の領域は、全国平均をやや下回っているものの向上がみられ、全国平均に大きく近づきました。日々の授業において、言語活動の充実を意識し続けた成果であると言えます。一方で、「人物像や物語の全体像を具体的に想像する」や「文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付ける」の記述式の問題などでは、全国との差が大きく、無解答率も高いため課題です。

【算数】

新学習指導要領が完全実施されて以降では、もっとも全国平均に近づき、全国の平均正答率を上回る問題も複数見受けられました。特に「分類整理されたデータを基に、目的に応じてデータの特徴を捉え考察できる」についての設問は約7割の児童ができており、概ねできています。また、児童質問紙で「算数の問題の解き方がわからないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えますか」について、「あてはまる」と回答した児童が全国平均を上回っていることから、児童の学びの構えの高まりを感じます。

【理科】

理科の実施は4年ぶり4回目でした。前回の調査結果との比較で、広く基礎的な知識の定着がすすんでいることがわかります。一方で、記述式は全体的に無解答率が高く、これまでの調査と同様に課題がみられます。引き続き、他者や日常生活とのかかわりの中で、学び得た知識を活用する場面を設定するなどの授業改善が求められます。

中学校 学力調査の結果より

【国語】

「読むこと」の領域は、全国平均を下回っているものの、かなりの改善がみられ、「場面と場面、場面と描写などを結び付けて、内容を解釈する」設問では府を上回る正答率となっています。一方で、「書くこと」の領域は、引き続きの課題です。「自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書く」設問では、解答の条件を満たすことができなかった生徒が多くいることから、その課題が顕著に表れています。

【数学】

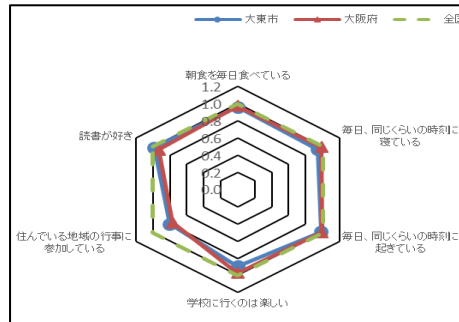
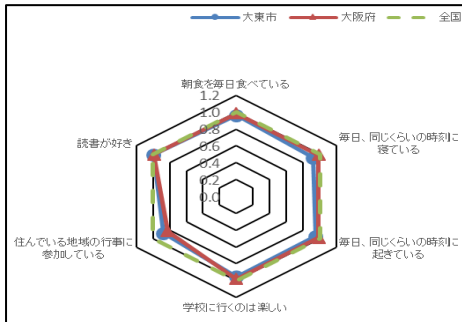
令和3年度との比較では、改善がみられる領域が多く、中でも大きな改善がみられたのは、「数と式」の領域です。これまで課題であった無解答率についても、改善傾向がみられます。一方で、問題文が長い設問では正答率が低くなる傾向がみられます。今後も、「学び合う」授業づくりをすすめながら、他者と協同してさまざまな問いと出会い、問題文を読み解き、解を見つけ出す経験を積み重ねていく必要があります。

【理科】

理科の実施は4年ぶり4回目でした。前回の調査に比べ、全体的に無解答率が低くなっています。生徒質問紙の「理科の授業の内容はよくわかりますか」について、肯定的な回答をした生徒の割合が、前回調査から大幅に増加していることから、授業改善の成果をみることができます。今後は、他者の考えから自分の意見や実験方法等を改善するような場面の、より一層の充実が求められます。

児童・生徒質問紙より

【資料1】生活の様子（左：小学校、右：中学校）

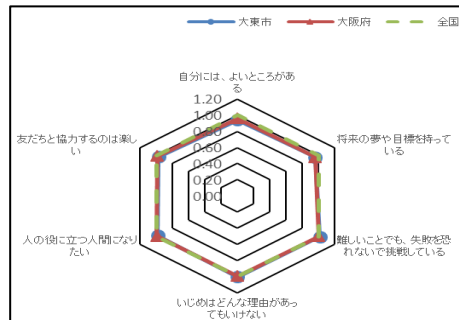
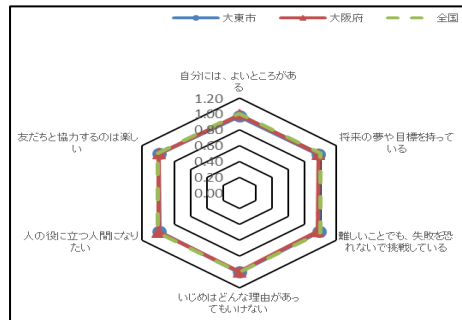


*小・中学校とも、生活習慣はほぼ全国並みです。
*小・中学校とも、「読書が好き」は大阪府より高く、日常的に読書に親しんでいる様子がうかがえます。



大東市教育委員会では、大東市教育大綱及び「だいたい教育ビジョン2022」を基に、「大東のめざす子ども像」の実現に向けて、授業改善に取り組んでいます。

【資料2】自己肯定感・規範意識（左：小学校、右：中学校）



*小・中学校とも、ほとんどの項目でほぼ全国並みです。
*小・中学校とも、「自分にはよいところがある」は全国よりやや低く、丁寧な関わりが求められます。

これまでの「学び合う」授業づくりをとおした子どもどうしのつながりの醸成や、学校・家庭・地域での丁寧な関わり等により、子どもたちの生活習慣や自己肯定感・規範意識等、集団の一員としての生活態度や自覚が育まれています。その中で、変化の激しい社会の中で各々が他者と協同して生き抜く力を育成するには、子どもを取り巻く学校・家庭・地域がより一層連携し、さまざまな場所や場面での、多くの人との多様な経験をとおして、子どもの成長を促し、見守ることが重要です。